

質の高い保育の実現に向けて ——帝京こども教育研究会研究主題の一考察——

溝口 綾子*

* 帝京短期大学こども教育学科

要 旨

時代の変化に応じて、幼児教育が変わろうとしている今、就学前の教育において専門的な知識や理解力、判断力、実践力が求められている。保育の出発点は子ども理解であるといわれているが、これは言い換えると、子ども理解の上に成り立つのが保育であるということである。平成27年度、28年度の2年間にわたり「子どもの姿をよみとる～保育実践の在り方～」のテーマで共同研究を進めるにあたり、公開保育や指導計画を通して保育実践を共通に見合い協議できる方法で行った。公開保育や事例発表では、子どもに何を体験してほしいのかという保育者の願いを持っていることは確認できた。しかし、その願いは保育者の子どもの姿のよみとりの精度によって指導の方向性にズレを生じる結果となった実践事例もある。一人ひとりの子どもの性格や能力を見極め、十分に引き出し高めしていくためには、子どもの姿に何を感じ、それをどのように解釈し援助していくかを「よみとりのサイクル」として捉えることが大切である。いつの時代も保育者としての変わらない資質といえ、子どもの内面や育ちを的確に理解し、援助する力であるといえよう。

キーワード：よみとり、指導計画、保育実践

I はじめに

帝京こども教育研究会は、平成21年に発会し本年度で8年になる。発会の趣旨については、昨今の社会状況は親の過干渉や逆に無関心（育児放棄）の状況がみられる。一方で、豊かな物質文明社会の中でバーチャルな状況を楽しみ、直接体験する機会が失われている。このような今の子どもの問題を巡って語り合いながら21世紀にはばたく素晴らしい子どもを期待してできた研究会である。子ども時代でなければ育てることができない子ども力（子どもらしさ）を育てる方法として実践事例を持ち寄って子どもを育てる方法原理を科学的に実証的にまた臨床的に研究することを目的としている。

時代の変化に応じて幼児教育が変わろうとしている昨今、就学前の教育・保育の場においては専門的な知識や理解力、判断力、実践力が求められている。文部科学省の報告書（2004）「幼稚園を取り巻く環境の変化と幼稚園教諭に求められる専門性」¹⁾においても幼児理解、総合的に指導する力、具体的に保育を構想する力、実践力等、教員に求められる専門性を挙げている。平成27年度、28年度の本研究会では保育者養成側の教員、幼稚園現場の教員、資格取得を目指している学生が集結して保育の出発点である幼児理解に立ち戻り学びあう機会とした。本稿

では、平成27年度、28年度の2年間の研究主題「子どもの姿をよみとる～保育実践の在り方～」について実践結果を基に考察するものである。

II 研究主題「子どもの姿をよみとる」の意味

本年度の研究主題に至る平成25年度、26年度の研究主題は「保育の中で気になる子ども」とし、個に視点を当ててその姿を捉え、集団と個のかかわりをどのように保育実践に生かしていったらよいかを研究してきた。本年度はさらに「保育をよりよくしていきたい」「保育を充実させていきたい」という保育者の願いを集結させて「子どもの姿をよみとる～保育実践の在り方～」と主題を設定して研究を進めてきた。

「子どもの姿をよみとる」とはどのようなことなのか、そのこと自体が大きな研究の課題でもある。保育の出発点は子ども理解であるといわれているが、それは言い換えると、子ども理解の上に成り立つのが保育であるということである。目の前の子どもの姿を事実として捉えることは事実把握である。その事実からその子どもの背景にある育ちや課題をみつけることが実態把握である。すなわち、子どもはどう遊んでいたかという事実把握に加え、保育者はその遊びの意味や子どもの課題をどうとらえたか

という実態把握をする。これを「子どもの姿をよみとる」とおさえる。そして、その実態からどのように育ててほしいかという保育者の願い、すなわち、ねらいを立て、そのねらいを達成するために必要な経験は何かを導き出し、どのように援助したらよいか環境の構成（再構成）を考え実践する。そしてその実践した保育について振り返り、省察する。そこから次の保育を予測し構想する。この一連の流れを「よみとりのサイクル」と意味づける。

Ⅲ 研究の目的と方法

保育の中での子どもの状態は、保育者が何らかの援助を行っている結果、生まれてくる姿である。前項でも述べたように「子どもの姿をよみとる」ことは、目の前の子どもの姿を事実として捉えるのみでなく、今までの子どもの状態と指導との関連性を捉え、その指導について保育者自身が振り返ることが必要である。つまり、実際の保育の場においてはPlan（計画）→Do（実践）→Check（評価）→Action（改善）のサイクルで保育を行っている。本研究会ではこの「よみとりのサイクル」の実際を持ち寄り研究の題材とし、「よみとる」内容や場面を共有しやすい「指導計画」^{注）}と「公開保育」を対象としてそれを通して検討することとした。対象はこども教育学科教員と帝京グループの4幼稚園教諭を中心にテーマによって学生の参加も呼び掛けている。参加者は、公開保育を通して保育実践を共通に見合い、「子どもの姿をよみとる」とはどのよ

うなことなのかを協議し理解することにより、それを指導に生かして保育を充実させることを目的とする。

Ⅳ 結果と考察

1. 平成27年度 公開保育と研究協議

(1) 第1回帝京こども教育研究会

日 時	平成27年6月20日（土）
場 所	帝京大学幼稚園
内 容	公開保育 9：00～11：00 分科会 12：50～14：30 全体会 14：30～15：30

当日は土曜日なので自由登園となっているため、平常よりは出席人数は少ない。公開保育では、15年前から行っている本幼稚園独自の「Tポップタイム」を実践した。この活動の趣旨は、「子どもにとって楽しく気持ちの弾むような時間となり、学年を超えて子ども同士がつながるところができるようにしたい」ということである。当日は「制作コーナー」「レゴブロックコーナー」「昔遊びコーナー」「ままごと・変身コーナー」の4つの活動を設定し、それぞれ4歳児5歳児の担任が主担当となり保育を進めている。指導案は、各活動ごとに作成され、幼児の実態は本日までの流れのおおよそが記述されている。本稿では代表例として「ままごと・変身コーナー」指導案の「Tポップタイム」の部分以下に抜粋する。

< 幼児の実態～本日までの流れ～ >

変身コーナーは以前より人気のあるコーナーで特に女兒や年少児を中心に多くの子どもが来る。ドレスが人気で冠をつけてお姫様になったり、エプロンをつけてお母さんになったりとおうちごっこをする姿がみられる。そのため、Tポップタイムの開始直後に着たい衣装がなくなり、着替えコーナーも雑然となった。

2～5回目では衣装を時間交代制にすることを提案すると、多くの子どもが衣装を着ることができるようになった。着替えコーナーも脱いだ服をハンガーにかけたり、靴をそろえて脱いだりなど、意識を持てるようになっている。そのため、遊びは持続してきたが、ままごとでは食器や食材を独占する姿もあり、使わない食器などが床に散乱して他の遊びの妨げになる状況であった。

そこで、使いたいもので遊ぶことができるようお店屋さんで買うという買い物制にしたところ「うさぎさんの人参買う」といった目的のある遊びがみられるようになった。一方で、買い物の仕組みが分からずお店の周りをうろうろする子どももいる。

<ねらい及び内容>

○お店屋さんごっこなどの設定遊びを通して、他学年の子と協力したり教えあったりしながら遊ぶ。

・お金の使い方が分からない年少児は年長児に教えてもらう。

・買い物の際、周りの友だちや保育者にほしいものを伝える。

○衣装に着替え、ごっこ遊びなどで役になりきって遊ぶ。

・衣装やお面を身に着け、役になりきり周囲もそれに合わせて買い物をする。

時 間	予想される幼児の活動	環境の構成（人・もの・場所・時間）
10：00	<p>T ポップタイム</p> <p>・ままごと、変身コーナーのルールを確認する</p> <p><ままごとコーナー></p> <p>・友だちと思い思いの遊具を使いままごとをする</p> <p>・他学年の友だちと交流して遊ぶ</p> <p>・お店屋さんの店員になりきり、お客さんを待つ</p>	<p>・好きな遊びを見つけ、遊びこむことができるよう保育者は幼児の遊びをとらえやすい位置にいて、それぞれの遊び方を把握し援助のタイミングを図る。</p> <p>・何をして遊ぼうか迷っている幼児には、子どもの気持ちを受け止め、遊びや友だちとのかかわりの楽しさを伝える等、遊ぶきっかけをつくる。</p> <p>・モノの取り合いなどトラブルのあった時にはお互いに納得するまで話し合うことができるよう間に入ったり見守ったりする。</p> <p>・自分なりになりきって楽しみつつ、お店屋さん、お客さん役に分かれてやりとりができるよう、お店屋さんには「いらっしゃい」等の掛け声があることや、お客さんにはほしいものを伝え、<u>お金を払うことができるように促す。</u></p> <p>・安全面を考え、モノが散乱しないよう靴のそろえ方、ハンガ</p>

	<p>・お金を作るために誘いあって工作コーナーに向かう</p> <p><変身コーナー></p> <p>・好きな衣装に着替える</p> <p>・着替えが1人では難しい場合は子どもたち同士で手伝いあう</p>	<p>一の扱い方等に注意しながら好きな衣装に変身することができるよう援助する。</p> <p>・他学年や他クラスと交流をする様子を見守ったりかかわりあうことができるよう、時には保育者も加わって楽しんだりする。</p> <p>・衣装の着替えがうまくできない場合は、自分でしようとする気持ちを大切にしつつ、自ら友だちや保育者に助けを求めることができるよう近くで見守り、状況に応じて手助けをする。</p> <p>・途中、時間で区切って衣装を着ている子は、まだ着ていない子に衣装を譲るよう声をかける。</p> <p>・野菜や果物などを種類ごとにトレーやかごに分けるよう声をかける。食器は棚に戻すよう声をかける。</p>
--	--	---

この指導案を基に実際の保育を参観した後、それぞれの分科会において次の協議視点で研究主題「子どもの姿をよみとる」について検討した。

協議視点：

- 1) 本日の子どもの姿からみて「本日の内容」（下線部分）は適切であったか
- 2) 保育者の援助は「本日の内容」（下線部分）と結びついていたか

本分科会では、上記2つの視点が交差しながら協議が進められたため、Tポップタイムでの子どもの姿と「本日の内容（下線部分）」とを関連付けた協議は深まらず、多くは本日の子どもの姿と保育者の援助の意見交換で終わった。そこで、本稿では分科会で出された意見のほか全体会、研究会終了後の質問紙調査での意見を総合して以下に考察する。

「Tポップタイム」の趣旨は「子どもにとって楽しく気持ちの弾むような時間となり、学年を超えて子どもたちがつながることができるようにしたい」ということであるが、これは日常保育において十分経

験できることである。あえてこうした時間を意図的にとるということは日常保育がそうになっていないからということになる。殊に3歳児にとっては入園して2か月、やっと母学級に馴染み安定し始めた時期にこうした交流が適切であろうか。例えば、ままごとコーナーでは、これまでの実態（点線部分）に「使いたいものを独占する」姿は発達からみると3歳児の姿と考えられるが、実際には異年齢の子どもとの混在する場においては経験知のある4～5歳児であった。「使いたいもので遊ぶことができるようお店屋さんで買うという買い物制すると、目的をもって遊ぶようになった」についての実態も多くは4～5歳児と推察できる。また、「買い物の仕組みが分からずうろろうする子どももいる」は3歳児が中心であった。これらの実態から「本日の内容（下線部分）」を「お金の使い方が分からない年少児は年長に教えてもらう」また「買い物の際、周りの友だちや保育者にほしいものを伝える」とし、その援助に保育者は「お客さん役にはほしいものを伝え、お金を払うことができるように促す（波線部分）」としている。これらの実態→ねらい→援助とつながっているように見えるが、3歳児がなぜ使いたいものが使えないのか、なぜうろろうするのかという実

態把握が必要である。「Tポップタイム」が今学期は6回目であるとはいえ、研究会参加者は、どこに行ったらよいかうろろしている3歳児の姿を見て、遊びに集中できていないし、何を楽しんでいるのかよみとれないという印象をもった。母学級である保育室以外に移動することに抵抗感はないのか、お店屋さんごっこの経験はあるのか、これまでに他学年との交流ほどの程度しているのか、など3歳児の育ちや課題の捉えが甘いという指摘もある。全体会の際、「Tポップタイム」の位置づけについて、「コーナー」の設定は子どもの状態をみて保育者が決定するという説明があった。「Tポップタイム」を特別なものという意識で保育者が設定している限り、子どもたち自身から遊びコーナーをつくり自発的なかわりのみられる日常性は出てこないだろう。

もう一つの協議視点である保育者の援助については、本日の内容と結びつかないものがある。例えば、本日の内容「お金の使い方を年長児に教えてもらう」については「～できるように促す（波線部分）」という援助になっているが、実際の保育場面においてどう促すのかということが大事であり、具体性に欠ける援助の記述になっている。そのため、保育の実際場面では言葉の掛け方や教材の示し方、補助の仕方など不十分なものとなっている。また、コーナーの主担当の保育者以外の保育者と指導案作成の段階から話し合いがされていないという報告を聞き、実際場面で連携の必要性を指摘されている。すなわち、2人の保育者がコーナーに関わる場合、リーダーとサブの動きを考え、共に保育するという姿勢が大切である。

(2) 外部講師による講演

平成27年12月12日（土）第2回帝京こども教育研究会において、幼稚園現場で実際に保育に当たっている幼稚園教諭（東京学芸大学附属幼稚園中野圭祐先生、教職経験14年）に本研究主題「子どもの姿をよみとる」を中心に講演をお願いした。

東京学芸大学附属幼稚園の自発的な活動としての遊びを中心とした保育の実践からパワーポイントで写真を交えながら5例の紹介があった。参加者が事例から学んだことは、子どもの主体性を育むためには子どもが主体的にかかわることができる環境の構成をすることは保育者の役割であるということであろう。例えば、「3匹のやぎのガラガラドン」の劇遊びの事例では、最近の子どもの状態には、友だちのしていることを真似する姿や、物語のイメージを楽しむ姿がみられた。その姿から必要な経験は何かを考えると「自分なりのイメージで物を作ったり動いたりして遊ぶ」や「そばにいる友だちや保育者の動きや言葉などを感じながら遊ぶ」ことをしてほしいと捉えた。そのために環境

を構成する際に、子どもに興味、関心がわいてきかかわらずにはいられないような状況をつくること、また、子ども自ら次々と活動を展開していくことができるようにすることが必要と考え、具体的な環境の構成を次のように考えている。

- ・「3匹のやぎのガラガラドン」の人形劇を見せる。
- ・ペープサートを作れるような絵や棒の材料を用意してみる（ヤギの絵、くるくる棒が作れる硬めの紙）。
- ・天井からトロールを吊り下げて橋を渡って遊べるような場を設定してみる。
- ・橋を作りたいと言うはずなので、巧技台とビームを用意する。
- ・なりきりグッズのお面のベルトを用意しておく。
- ・なりきりグッズを作ったらすぐに参加できるような場をトロールの近くに設定しておく。

上記の環境にかかわっている子どもの姿が画面に映し出された。その姿は自由感にあふれ、遊びを十分に楽しんでいることがうかがわれる。それは、今（4歳児10月頃）の子どもの姿のよみとりを的確にしていること、その姿から子どもに必要な経験をねらい、内容として導いていること、そのねらいを達成に向け保育者の具体的な援助（環境の構成）を考えて保育を実践していること、そして自分のよみとりを振り返り次の保育につなげていることである。これこそが「よみとりのサイクル」といえよう。

子どもが身近な環境と主体的にかかわり、さまざまな体験を重ねる中でその環境の意味やかかわり方を学びこれを自分の中に取り込んでいく。こうした子どもの姿のよみとりと、子ども理解に基づいた保育者による計画的、意図的な環境の構成があつてこそ、心動かされる体験を得ると考える。

2. 平成28年度 公開保育と研究協議

(1) 第1回帝京こども教育研究会

日 時	平成28年7月9日（土）
場 所	帝京幼稚園
内 容	公開保育 9：00～11：30 分科会 13：20～14：20 全体会 14：20～15：30

本日は保育室の関係上、3歳児学年（4学級）は休

園となり、4歳児3学級、5歳児3学級の公開保育である。本幼稚園では年少時から毎月1回『絵を描く』『制作する』活動を継続していて今日は4歳児、5歳児ともこうした造形表現活動を実践する。本稿では5

歳児の活動を中心に考察する。以下の指導案は、年長組の造形表現活動（平面素材による絵画制作遊び～自分たちの海のイメージを描く～）に関する部分を抜粋したものである。

<前日までの子どもの実態>

年間を通し、絵の具やクレヨン、スタンプ遊び、絵画遊び、制作遊びを季節に応じ楽しんできた。本園では年間に絵画、制作を数十回行っている。そんな中、一人ひとりの反応はさまざまである。年少組の際、のりやボンドの感触を嫌がったり、クレヨンで画用紙に描くことを好まなかったり、成長するにつれそういった姿はあまり見られなくなるのは、これまでの経験から制作すること→それを友だちや保育者、保護者と共有すること→完成する喜びを知ったということからと推測される。子どもたちがのびやかに楽しんで絵画や制作を『遊び』と感じられるよう次の項目に着目した。

- ・導入を入念に計画し、反応を見計らい実践する。
- ・五感を刺激する。

以上の項目を重視して進めていく中で、子どもたちの反応に変化が起きた。例えば、年少時より絵画遊びをあまり好んでいないT児の場合、自由画や体験画の際は決まって憂鬱そうな反応をする。年中頃は室内遊びで絵を描くことは皆無であった。年長児になり、前に経験した絵の具づくりをしたいと担任に告げ40分間ほど楽しんでいた。（要旨のみ）

<本日のねらい及び内容>

○ワークショップというサブテーマから友だちや担任、他クラスの保育者とともに素材の感覚を楽しみ、最終的に{自分たちの海のイメージ画}を描く。

・チョークや液体のりで絵の具を作り色の変化を楽しむ。

・先日の熱帯植物館遠足での体験やクラスで絵本や図鑑を通し興味を持った海の生き物の絵画を完成させる。

○自分以外の意見や反応を体感する。

・同じグループの子どもや保育者の行う行動に刺激を受け、それを真似たり自分なりに応用して楽しむ。

時間	活動内容	予想される子どもの姿	保育者の援助
9:30	本で行う絵画のイメージを膨らませる	<ul style="list-style-type: none"> ・保育者の行う読み聞かせを聞く ・以前に遠足に行った熱帯植物館をイメージする ・今学期に経験した様々な海の絵本、図鑑、制作を思い出し話す 	<ul style="list-style-type: none"> ・各クラスの絵本や写真、図鑑などを駆使し、子どもたちの好奇心を刺激する
9:40	チョークと液体のりで絵の具を作る	<ul style="list-style-type: none"> ・各自のグループに分かれ絵の具を作る ・自分たちで説明を理解し話し合い、材料を取りに行く 	<ul style="list-style-type: none"> ・保育者は各担当の場所に行き子どもたちとともにチョーク絵の具を作る ・グループ内でトラブルが起きた場合には見守り、時には中止に入る
10:00		<ul style="list-style-type: none"> ・各自紙皿にチョークと金網を用意し削る ・保育者に液体のりを入れてもらい各自混ぜる ・筆を使い、水入れから水分を含ませチョーク絵の具を作る 	<ul style="list-style-type: none"> ・準備物が分からなくなった際には声をかけたりヒントを伝える ・使い終わった用具を整頓する ・緊張している子へスキミングをとりながら安心できる配慮をする ・段取りをホワイトボードに掲示し確認できるようにする
10:45	海の中のイメージを描く	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>数日前に描いた海の中のイメージ画を保育者から受け取り、塗り絵コーナーに移動する</u> ・絵の具づくりに集中し継続している 	<ul style="list-style-type: none"> ・水や液体のりの量がうまくいかない子にアドバイスする ・もう少し絵の具づくりに集中したい子の思いを汲み取り、一定の時間までは自由にできる配慮をする

	京花紙で縁取り	<ul style="list-style-type: none"> ・ <u>自分の表現した魚や海藻、海水に手作りの絵の具を塗る</u> ・ グループの友だちと色を交換したりすることを喜ぶ ・ 時には他のグループとも交流を持ちながら進める ・ 以前制作で使用した京花紙のちぎったものの残りを使用し、作品のふちを飾る ・ チョーク絵の具を使用し京花紙を貼りつける ・ 京花紙が貼りつくことに驚き喜ぶ ・ 完成した作品を保育者や参観者に褒めてもらう 	<ul style="list-style-type: none"> ・ <u>各グループの表現を認め、喜びを共感する</u> ・ 新たな発見があった場合はホワイトボードに書き記す ・ 絵の具づくりを継続している子を見守る ・ 改めて今回作成したチョーク絵の具の材料が液体のりであることと、のりと同じ効果もあることを伝える ・ 子どもたちの喜びに共感する ・ 担任以外の保育者からも認め、褒められる環境を設定する
--	---------	--	--

※上記の指導案中に図示されていた環境構成の枠は省略する

この指導案をもとに実際の保育を参観した後、それぞれの分科会において次の協議視点で研究主題「子どもの姿をよみとる」について検討することとした。

協議視点：

- 1) 本日の子どもの姿からみて「本日の内容」（下線部分）は適切であったか
- 2) 保育者の援助は「本日の内容」（下線部分）と結びついてきたか

分科会では5歳児の活動が3学級に分かれて行われたため、3グループで協議が進められた後、まとめの話し合いがもたれた。一つのグループでは司会者側から事前に本日の印象場面をメモする用紙が配布され、本日の録画を見ながら協議は進められた。この方法

は、保育の場面を切り取り具体的に子どもの姿や保育者の援助について語り合えたという意味では有意義なものではあった。そこでの協議の内容は、場所の設定、教材（絵の具、のり、チョーク）の準備、保育者の援助などの本日の保育がどうであったかということが中心となった。本研究主題についての協議視点は、子どもの姿のよみとりがどのように「本日の内容（下線部分）」につながっているか、また、援助は適切かどうかである。そこで、この分科会での協議内容も含めて本日の指導案と子どもの姿、保育者の援助とを総合して以下に考察する。

指導案の「前日までの子どもの姿」は、絵画制作活動について入園から本日に至る過程と、一人の子どもの姿の記述となっているため、導き出された「本日のねらい及び内容」とが結びつかない。つまり、保育の中で絵画制作活動をどのように取り組んでいったらよいのかという説明になっている。「本日の内容（下線

部分)」に示されているように、絵の具づくりを楽しむことや海の生き物の絵を描くことを必要な経験としているので、本日に至る子どもの姿、例えば、絵の具づくりや海の絵の描画の状態がどうであったかという具体的な記述があると、経験させたい「本日のねらい及び内容」との関連が明確になると考える。

「予想される子どもの姿（波線部分）」に対する保育者の援助は「各グループの表現を認め、喜びを共感する（点線部分）」となっている。しかし、実際の保育では数日前に描いた魚の絵はグループではなく子ども個々の絵であり、それに手作りの絵の具を自分で塗るという姿である（波線部分）。グループで行っていることはチョークを削り、それを液体のりに混ぜるという絵の具作りである。これに対する「保育者の援助」は、自由感をもって絵の具作りを楽しませたいという願いは伝わっていたと考える。「前日までの子どもの実態」にある「絵画や制作を『遊び』と感じられるように…（二重線部分）」という記述から、これまでは子どもたちにとって絵画や制作は『遊び』ではなかったのかという疑問を持った声も聞かれる。すなわち、絵画や制作の活動を日常的に自由に取り組める環境ではなく、いわゆる「一斉保育」の保育形態での実践であったのであろうか。しかしながら、一斉保育で

あっても保育者が一方的に活動させるのではなく、一人ひとりの子ども理解の基に自発性や創造性を重視する保育であればその経験は次の活動の動機につながると考える。

(2) 事例発表と研究協議

平成28年11月19日（土）第2回帝京こども教育研究会では、帝京グループの4幼稚園から「子どもの姿をよみとる～保育実践の在り方～」のテーマで保育実践事例を1事例ずつ発表しパネルディスカッションを行った。4つの事例は、色水遊び（帝京大学幼稚園）、3歳の生活習慣の確立（帝京にしき幼稚園）、男児Aについて（帝京幼稚園）、4歳児のごっこ遊びの取り組み（帝京めぐみ幼稚園）である。本稿ではこのうち、代表例として4歳児のごっこ遊び（お医者さんごっこ）の事例について考察する。

本幼稚園は、週日案で保育実践している。前週の学級の実態を把握しそこから今週のねらい及び内容を導いている。本事例は、前述した夏休み明け第1週の子どもの状態から事例を抽出している。保育者は休み明けの不安定な状態（波線部分）から、友だちや保育者と触れ合う楽しさを取り戻してほしいという願いを「ねらい及び内容（点線部分）」としているが、不安定な状態からグループでごっこ遊びをするようになっ

4歳児学年9月初めの週案より

子どもの状態：

学級の大半の子どもは、前学期の友だち関係を中心に自分から好きな遊びに取り組み、できるようになったことに満足感を覚えて、自分の思いつきやイメージを表して遊んでいる。一方で、夏休み中に3歳児学級で一緒だったクラスの集まりが多かったようで、友だち関係が進級時に戻っている場面が見られた。こうした中でごっこ遊びをしているグループが3つあり、グループ間でのやりとりはあるものの、それぞれで遊んでいる姿であった。

9月第1週

ねらい：園生活のリズムを取り戻し、保育者や友だちと過ごすことを楽しむ

内容：友だちや保育者と話したり触れ合ったりして再会を喜ぶ

環境の構成のポイント：期待をもって登園する子、登園を渋る子と様々な姿が予想されるため、それぞれの子どもの気持ちを受け止め、スキンシップを多くとったり、遊びの中に保育者も入ったりする。

一つのグループの遊び「お医者さんごっこ」の展開を次に示す。

A 児たちはいつも仲良し 3 人で遊んでいる。しかし、A 児は他の 2 人に時々邪険にされ自分を発揮できない場面がある。担任は、A 児が「お医者さんごっこしたい」と言い出したことをきっかけに、何とか遊びの中で自己発揮してほしいと願い、お医者さんごっこを始められるようお医者さんグッズ（注射器、聴診器、など）の制作コーナーを設定した。他の 2 人も仲間入りしてきた。担任も一緒に作りながら「これはどうする？」など A 児に尋ね、A 児が遊びの中心になるようにする。すると、他の 2 人も「薬も作る？」と A 児を意識して遊んでいる。担任は、A 児の提案で始まった遊びなので、自信につなげてほしい、自己発揮してほしいと願った。クラスの子どもたちの多くも参加してきたため、お医者さん役であふれ。患者役がいなくなった。「隣のクラスの子に患者さんになってもらおう」「先生になってもらおう」「お人形を患者さんにしよう」と A 児も他の子どもとアイデアを出し合いながら、この遊びは 2 週間あまり続いた。

た過程の具体的な状態像の説明があると「ねらい・内容」とのつながりが明確に伝わる。環境の構成のポイントでは、子どもの気持ちに寄り添いながら保育者も遊びの中に入る（下線部分）としている。これを踏まえて本事例では子どもの考えを優先する一方で、保育者から教材や場所を提示している。特に本事例は、気になっている A 児に仲良しグループでの遊びを十分楽しんでほしいという願いを持っているため、主体性を育むという名のもとに子どもたちに任せきりというのではなく、A 児にとってどうかということを判断しながら保育者側から環境設定（二重下線部分）を提示することも必要と考える。さらに、保育終了後に子どもの遊びの様子からその日の振り返り（省察）を行うことは、次の保育への指導の方向性を考えたり、具体的な方法を試みたりなどの構想を生み出すことにつながると考える。

V まとめと今後の課題

「子どもの姿をよみとる」とはどのようなことなのかを日常保育や公開保育の実践を通して検討してきた。2の項で述べたように「子どもの姿をよみとる」とは、目の前の子どもの姿とその背景にある子どもの育ちや課題をよみとることである。4の項で取り上げた公開保育や発表事例で共通していることは、保育者は子どもに何を体験してほしいかという願いをもっ

ているということである。しかし、その願いは、保育者の子どもの姿のよみとりの精度の違いによって指導の方向性にズレを生じる結果になった事例もある。保育において、子どもの姿から熟慮して計画的に組み入れてみたことが空振りに終わったり、ふとしたことがきっかけでよい結果につながったりする。一人ひとりの子どもの性格や能力を見極め、十分に引き出し高めていくには子どもの姿に何を感じ、それをどのように解釈し援助していくかを「よみとりのサイクル」として捉えることが大切である。すなわち「よみとりのサイクル」とは、子どもの姿をよみとり、そこからねらいを立て必要な経験を考える。そして、具体的な環境（ヒト・モノ・場所・時間）の構成を考え保育実践する。その実践を省察して次の保育を構想することである。したがって、この構想は保育者が自分勝手にするものではない。子どもの姿をよみとることで成立すると考える。小川（2008）は「指導計画を立てるといふ仕事は、保育者が一人ひとりの幼児の明日の活動をどう予測し、それにどう備えていけるかを過去の幼児の行動を振り返ることで構想することである」²⁾と述べている。これらをふまえると、保育実践するにあたり立案する指導計画の根底をなすのは実態把握である「子どもの姿をよみとる」ことを的確にすることであると考える。文部科学省（2008）の学校評価ガイドライン³⁾では、P→D→C→Aで改善に生かしていくことが示されているが、今回の研究の結果、P（計

画)の段階で子どもの状態像を確実におさえるために、その前の段階に「子どもの姿のよみとり」をあえてS(See)として位置付けることを提案したい⁵⁾。繰り返し述べているが、幼児教育においてこども理解は保育の出発点であり、よみとり(See)はこども理解の基本的なポイントであると考ええる。

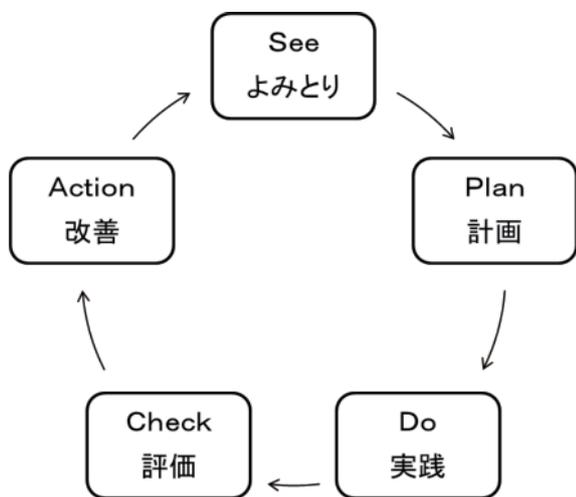


図1

図1に示したように、S(よみとり)→P(計画)→D(実践)→C(評価)→A(改善)というサイクルで循環している。これを繰り返すことによって保育の質は高まる。このS(よみとり)は、次にあるP(計画)の根底をなすものである。ただ「見る」ではなく、誰が誰とどこで何をどのようにしていたかという一人ひとりの子どもの姿のどの部分に焦点を当てているのか、その姿をどのように受け止め、どのように考え探求していくのかという視点を持つことが大切である。このことが子ども理解をさらに深めていくことになる

と考える。
1の項でも述べているように文部科学省の報告書¹⁾では「幼稚園教員は、幼児教育の中核を担っているので、幼稚園教員に優れた人材を得、また、その資質の向上を図ることは極めて重要である」とある。また、中央教育審議会は幼児教育の今後の在り方として次のような方向を提案している。それは「家庭・地域社会・幼稚園等の施設の三者による総合的な幼児教育の推進」と「幼児の生活の連続性及び発達や学びの連続性を踏まえた幼児教育の充実」⁶⁾である。このことから保育者の役割として大切なことは、子どもをよりよく育てるために子どもの育ちの背景にある問題の解決も視野に入れる必要がある。これらを踏まえると、保育者の資質として、まず子どもを理解する力と環境(遊び・活動・教材など)を考える力、子育てを支援する力が必要であり、それが保育を構想し実践する力

につながると考える。したがって幼稚園教員にはこうした高い専門性が求められているということになる。

そこで、幼稚園教員は、自らの資質を高めるべく保育の知識やテクニックなど自己学習のほか、幼稚園と保護者や地域との連携をも視野に入れた園内研修や様々な研究会、学会などの機会を得て専門性を高める研鑽を積むことが必至と考える。

いつの時代も保育者として変わらない資質は何かといえば、子どもの内面や育ちを的確に理解し、援助する力であるといえよう。

(本稿文中の指導案の下線引用者は筆者)

注) 幼稚園における指導計画:

指導計画は各園の教育課程に基づいて立案する。指導計画は、長期(年間・期間・月間)と短期(週案・日案・活動案)がある。多くの幼稚園は、週案を立案し保育実践している。週案を構成する項目は、子どもの状態(前週の子どもの姿)、ねらい(子どもの状態を踏まえた指導の方向性・保育者の願い)、内容(ねらいについて保育者が指導し、子どもに経験してほしいこと)、環境の構成(ねらい及び内容を達成するための保育者の援助・環境の構成)である⁸⁾。

文献

- 1) 文部科学省 幼稚園を取り巻く環境の変化と幼稚園教諭に求められる専門性 2004年
- 2) 小川博久 保育援助論 生活ジャーナル 2000年
- 3) 文部科学省 学校評価ガイドライン 2008年
- 4) 河邊貴子 遊びを中心とした保育 萌文書林 2011年
- 5) 全国国公立幼稚園・こども園長会(編) 月刊「幼児教育じほう」 2017年3月号
- 6) 中央教育審議会 子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について——子どもの最善の利益のための幼児教育を考える—— 2005年
- 7) 文部科学省 幼稚園教育要領 2008年
- 8) 小田 豊・神永美津子(編) 教育課程総論 北大路書房 2009年

Toward Realizing High Quality Childcare: Teikyo Children's Education Group Research Topic

Ayako MIZOGUCHI *

* Department of Early Childhood Education, Teikyo Junior College

Abstract

Early childhood education is about to change according to changes in the times, specialized knowledge, comprehension ability and practical ability are required in pre-school education. It is said that the starting point of childcare is children's understanding, in other words. Childcare stands on children's understanding. We carried out in 2015-2016 the way of commonly matching and negotiating childcare practice through open childcare and guidance plan with the theme of "Reading about the appearance of children —way of childcare practice—" In public childcare and presentations, we were able to confirm that we have a teacher's wish as to what the child wishes to experience. However, there are practical cases that wish resulted in deviation in the direction of guidance due to the accuracy of reading of the child's teacher's figure. In order to determine the character and ability of each child's children and to fully enhance their withdrawal, it is important to understand what they feel in their appearance and how they interpret and assist them as "a cycle of reading" it is important.

Keywords : Reading, Guidance plan, Nursing practice